

〈研究ノート〉

人間科学としての生活支援の知識体系を旨とした新教育課程 領域「こころとからだのしくみ」の 科目「(日常生活活動に関連した) こころとからだのしくみ」の教育内容の編成

城 正 子

要約

科目「(日常生活活動に関連した) こころとからだのしくみ」についてICFを援用し、人間理解と生活支援の根拠となるように教育内容検討と編成をし、人間科学としての生活支援の知識体系を図ろうとした。

キーワード 介護福祉士養成新教育課程
日常生活活動に関連するこころとからだのしくみ
ICFの援用
人間科学としての生活支援の知識体系

目次

- I はじめに
- II 新教育課程と領域「こころとからだのしくみ」の位置づけ並びに科目「(日常生活活動に関連した) こころとからだのしくみ」についての教育内容の組み立てと到達点
- III 「(日常生活活動に関連した) こころとからだのしくみ」の教育内容と到達度
- IV 考察
- V まとめと今後の課題

I はじめに

第17回日本介護福祉教育学会大会（主催：日本介護福祉士養成施設協会）は、教育課程改正2年目を経る中で「介護福祉士の専門性の創造（副題 新教育課程の現状と可能性を探る）」をテーマとして2010年8月23・24日と開催された。その教育講演において黒澤貞夫教授が介護福祉士の社会的使命と専門性の原点について次のように論じられた。「今や介護福祉士は社会的ミッションをもっている。これは介護福祉の専門性の原点である。即ち、この原点は一人ひとりの生活の現実を見ることから出立する。それは現実の生活課題解決過程における実践力を意味する。即ち、専門性をもった優れた実践力とは価値・知識・技術を伴うものである」というものであった。従って新教育課程の教育実践において教育内容にこれら

を自明とし盛り込まなければならない。その内容はそれぞれの科目に価値、知識体系、生活支援技術を個別の生活課題解決のために融合していける教育内容・方法の研究であると言いつ直された。

この講演において日頃から新教育課程の下、教育内容・方法の重要性と困難性を思案している筆者に当然という合点を与えたのである。

かねてから黒澤貞夫教授の人間学としての生活支援の思想について深く探求する機会があり、その視点から新教育課程 領域「こころとからだのしくみ」の教育内容編成にあたり、介護福祉の専門性を踏まえ、人間科学としての生活支援の知識体系に近づくことを本研究の目的とする。

II 新教育課程と領域「こころとからだのしくみ」の位置づけ並びに科目「(日常生活活動に関連した)こころとからだのしくみ」についての教育内容の組み立てと到達点

1 新教育課程に於ける領域「こころとからだのしくみ」の位置づけ

2007年社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、介護福祉士の役割拡大と共に2009年度より介護福祉士養成のための教育課程改正が施行された。その教育課程は三つの領域よりなり、領域「介護」をバックアップする領域「人間と社会」と領域「こころとからだのしくみ」による介護福祉教育体系の刷新とされた。

領域「こころとからだのしくみ」の授業進度は最初に科目「こころのしくみ」と「からだのしくみ」の理解を置き、その後「(日常生活活動に関連した)こころとからだのしくみ」を組み入れ、これらが領域「介護」に関連して系統的に学ぼう配慮する必要がある。また、科目「介護過程」や「生活支援技術」、「コミュニケーション技術」の根拠を導く教育内容の勘案と整合性が求められる。

2 科目「(日常生活活動に関連した)こころとからだのしくみ」の授業内容の組み立てと到達点

各単元の授業の組み立てにおいては「(日常生活に関連する)こころとからだのしくみ」について次のようにとらえ授業内容を編成した。

- ①人間の生命活動は外界から取り入れる日常生活活動より成り立つ。
- ②日常生活活動(行為と感情や認識)は、こころとからだは密接に関係して成り立つ。
- ③日常生活活動(行為と感情や認識)は、かけがえのないその人らしさを創り出す。
- ④日常生活活動(行為と感情や認識)は、環境的要因の影響を受け、環境調整が必要であり、また個人の生活リズムの影響とその調整が必要である。
- ⑤日常生活活動(行為と感情や認識)は、生活支障や意欲低下を生じ、そのメカニズムと対応を知る。
- ⑥日常生活活動(行為と感情や認識)が及ぼす体調変化や急変の観察と関係職種との対応を知る。

3 授業の到達度

さらに授業の到達度を次のように明確化した。黒澤貞夫氏は生活支援モデルの提唱にあたり、ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）モデルを準拠モデルにすると述べている。それに従いこの単元の授業の到達度について「ICFを援用し日常生活活動に関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」として單元ごとに別図のように組織化し、その内容を明らかにした。私達は今、この介護福祉教育体系を科目別体系から領域別体系に変換をし、理論と実践を融合させる教育体系を旨とそうとしている。つまり、介護サービスの利用者理解とそれに基づく生活支援の実践を行う教育を旨とするものである。この科目を学ぶことにより日常生活活動に関連する体の仕組みや心のメカニズムについての知識を単に憶えるのみでなく、授業の到達度は利用者一人ひとりの日常生活活動に関連する生活支障・意思低下とそのニーズを明らかにする情報と判断材料並びに生活支援の方法の根拠となる知識を学ぶことに置いた。ICFのモデルを使って日常生活活動の支障、意欲低下に関連する介護サービス利用者の理解とニーズを明らかにする方法ならびに生活支援技術の根拠を学べる。つまり、ICFは人が生きることの全体像をつかめ、日常生活活動に関連する心と体の仕組みや背景因子をとらえやすい。そして利用者理解や生活支援のための方向性を見出しやすい。

Ⅲ 「(日常生活活動に関連した)こころとからだのしくみ」の教育内容と到達度

1 単元「食事に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 単元「食事に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容

①食生活の生理的、精神的、社会的意義

食事の意義は生命を維持し、生活活動を営み、更にその人らしさを創り出す食生活であることを学ぶ。

②食欲・口渇の欲求の仕組み、美味しさ、生き甲斐につながる食行動の成り立ち

食欲は血糖値の低下、胃壁の縮み、電解質濃度の変化により食欲中枢が刺激され、また五感の働きや過去の記憶、その場の雰囲気により美味しさや生き甲斐或いは不味さを感じる要因となることを学ぶ。

③食生活の環境要因と環境調整の視点

物理的、人的、文化的、社会的、管理的環境要因とその環境調整を学ぶ。

④食事の生活支障、食欲低下の原因・背景因子と食事を美味しくバランス良く食べる支援方法

老化や視覚、咀嚼・嚥下、認知などの障害、参加制限、背景因子の食事への影響とその対応を学ぶ。

⑤食事が及ぼす体調変化や急変時の観察と関係職種との対応

低栄養、脱水、ストレス、窒息についての観察と対応及び関係職種との連携を学ぶ。

(2) ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「食事に関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」（図1参照）

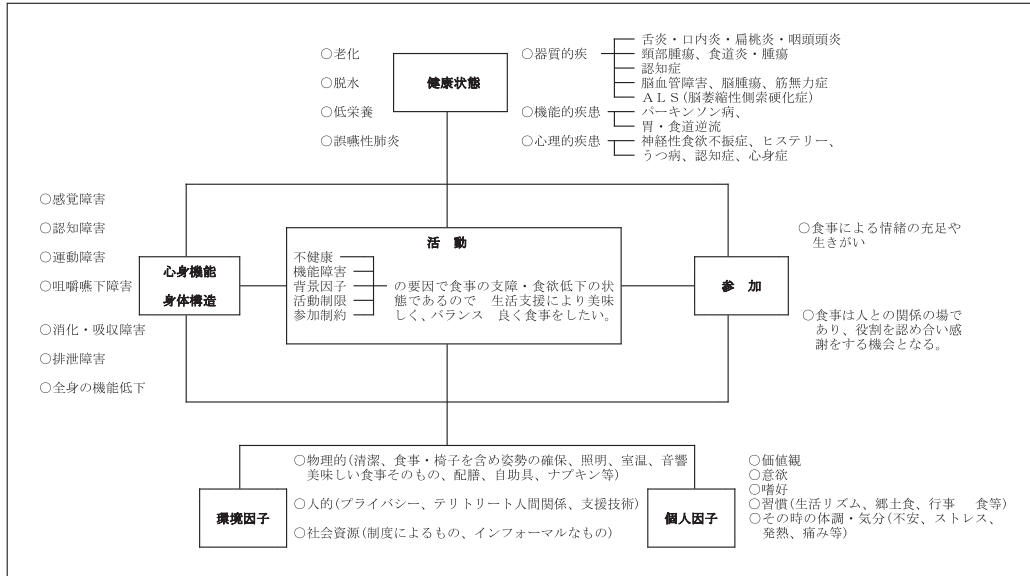


図1 ICF (生活機能・障害・健康の国際分類) を使った「食事に関連するところとからだのしくみと生活支援の関係」

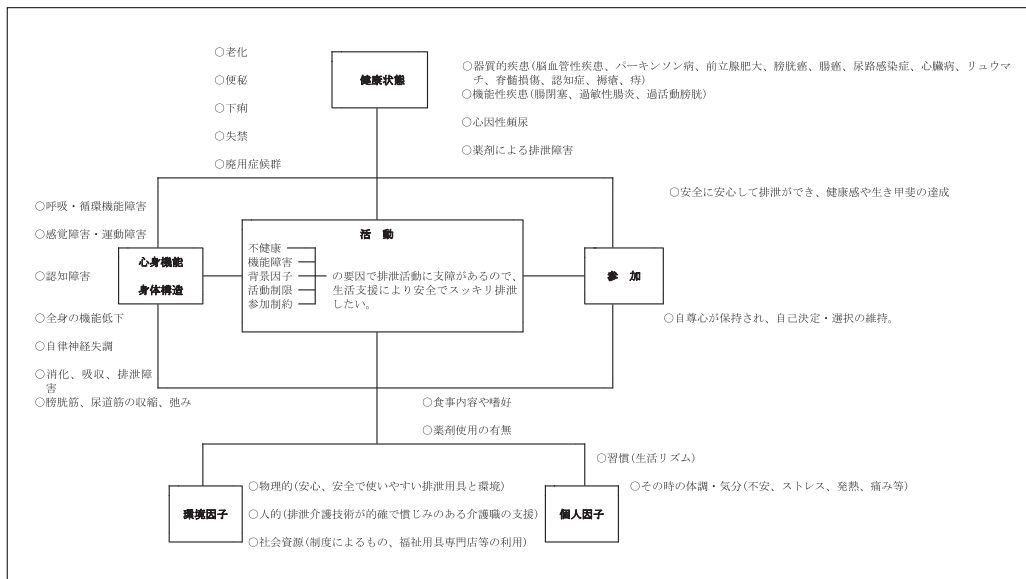


図2 ICF (生活機能・障害・健康の国際分類) を使った「排泄に関連するところとからだのしくみと生活支援の関係」

2 単元「排泄に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 単元「排泄に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容

①排泄の生理的、精神的、社会的意義

排泄の生理現象は生命維持、健康保持のための必須条件である。そして排泄物や排泄状態は健康を判断する重要な情報源である。また、順調な排便・排尿は精神的な安定感をもたらし、生活全体を快適に営む基礎となっている。そしてそれは最も個人的な行為である。排泄を自力で行うことは人間としての尊厳を守り、社会的に自立するために重要な条件である。したがって援助を要する人に対しては尊厳あるケアの在り方が求められる。

②排泄のメカニズムと自然な排泄リズムの支援法

便・尿の生成、排便・排尿の仕組みを理解し、自然な排泄のための生活リズムを整える支援方法を学ぶ。

③排泄のための行動の成り立ちと環境条件

排泄の行動は身体内部の感覚、認知能力、移動能力や手足の屈伸など運動能力によるものである。その時の運動能力を支えることが出来るようなトイレの道具、環境条件について学ぶ。

④排泄のセルフケアのための心の支援方法

排泄は一日の生活リズムの影響を受けやすく、その認識や行動のための心理的支援方法を学ぶ。

⑤排泄の生活支障と障害の原因・背景因子と尊厳を守り快適さをもたらす生活支援方法

老化によるコンチネンスの低下、運動機能低下、消化・吸収機能の低下や認知症、尿路感染症、便秘などの障害や病気及び環境・個人的背景因子など排泄への影響と支援方法を学ぶ。

⑥排泄が及ぼす体調変化や急変時の観察と対応及び医療職との連携

感染症による消化器症状、便・尿の性状異常などの観察力と医療職との連携を学ぶ。また、緩下剤、座薬の与薬などの医療的介助方法を理解する。

(2) ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「排泄に関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」（図2参照）

3 単元「移動に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 単元「移動に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容

①移動の生理的、精神的、社会的意義

移動とは、寝返り・起き上がり・歩行を基本動作として日常生活活動、家事、仕事、スポーツ、趣味活動という身体と心の動きである。移動の意義は人間が生きることの全てである。動くことで生命を維持し、生活を支え、その人らしい人生を創り出すことである。

②生命活動を担う内臓器官の自律リズム

呼吸、心臓拍動、消化・吸収・代謝、排便、尿生成と排尿、種族保存に関わる精子の活動や月経周期、ホルモンの分泌、睡眠・覚醒の生体リズムなどの生命活動を学ぶ。

③生命活動を支え、その人らしさを創り出す日常生活活動

人間は骨・筋肉・関節・神経の働きによる動物性器管系が動くことにより生命活動に必要なものを取り入れ、さらに人間としての一人ひとりの生活様式を創り出すことを学ぶ。

④移動を創る心の仕組み

大脳皮質は意欲と動機づけの中枢であり、人間らしい行為を創り出す源であることを学ぶ。

⑤日常生活活動において良い姿勢を保つ仕組み

日常生活活動としての良い臥位、座位、立位、歩行の仕組みを学ぶ。

⑥心身の活性化のメカニズムと介護予防、介護者のストレス解消法

廃用症候群のメカニズムや介護者のストレスを理解し、心身の活性化の方法を学ぶ。

⑦老化、病気、心身機能低下、活動制限・参加制約、背景因子が移動に及ぼす影響と生活支援法及び環境調整

骨粗鬆症、脳血管障害後遺症、認知症、廃用症候群、心身障害、参加制約や生き甲斐喪失などが及ぼす移動への影響と生活支援法及び環境調整法を学ぶ。

⑧転倒のリスクマネジメント、脳卒中発作の早期発見と医療職との連携

(2) ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「移動に関連するところとからだ」

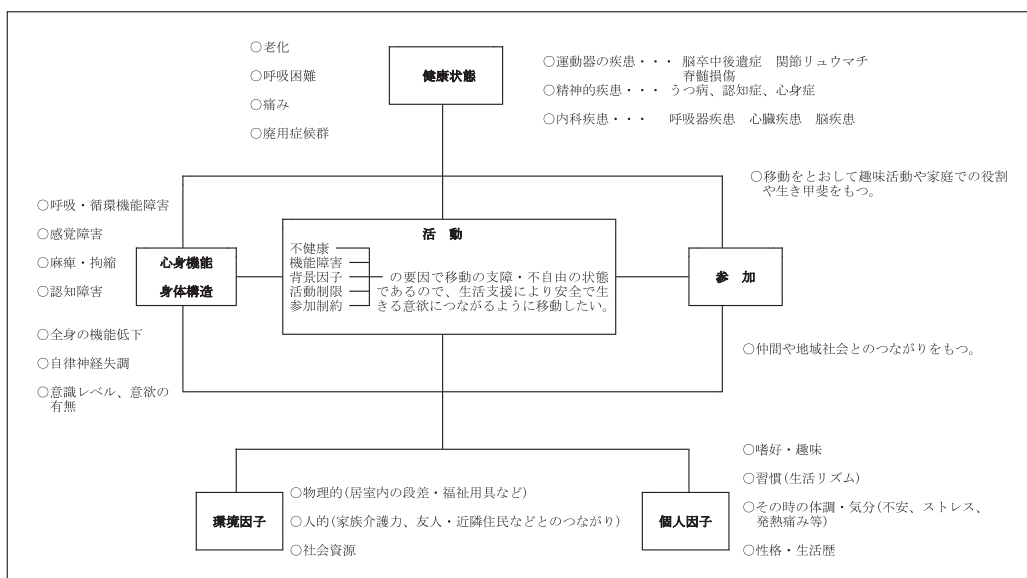


図3 ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「移動に関連するところとからだのしくみと生活支援の関係」

のしくみと生活支援の関係」(図3参照)

4 単元「身じたくに関連するこころとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 単元「身じたくに関連するこころとからだのしくみ」の教育内容

①身じたくの生理的、精神的、社会的意義

身じたくは身体や衣服を清潔にし、生活を行うために適した準備をすることである。身体の清潔、服装、容姿、態度などに気を配り、自分らしさを表現し、人に不快を与えないようにする心掛けである。

②皮膚・粘膜や衣服の働きと身じたく

皮膚・粘膜の働きは外界の情報をキャッチしたり、新陳代謝による生命活動と健康保持をしている。したがって皮膚(毛髪、爪を含む)・粘膜(口腔、鼻腔など)の清潔を保ち傷つけないことがその機能を正常化し、新陳代謝を高める。また、皮膚感覚は快・不快をもたらす、さらには情緒の発達や生き甲斐感さえもたらす。

衣服の働きは体温調節、身体の保護と清潔、さらに自分らしさを表現し、社会生活に深く関わっている。

③老化、病気、心身機能低下が身じたくに及ぼす影響と対応

老化による感覚器の形態・機能低下の状態及びそれらが身じたくに及ぼす影響を明確にする。また、パーキンソン病、脳卒中後遺症などによる運動障害や認知症による精神の機能低下が身じたくに影響する状態やその対応を明らかにする。

④老化、病気、心身機能低下が口腔の清潔に及ぼす影響と対応

老化、病気、心身機能低下が口腔の清潔や咀嚼力、生活の質に及ぼす影響とその対応を明らかにする。

(2) ICF(生活機能・障害・健康の国際分類)を使った「身じたくに関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」(図4参照)

5 単元「入浴・清潔保持に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 単元「入浴・清潔保持に関連するこころとからだのしくみ」の教育内容

① 入浴及び清潔保持の生理的、精神的、社会的意義

入浴・清拭による清潔の保持は皮膚・粘膜の汚れを取り除き、その正常機能を保つ。そして神経・筋肉の疲労回復や心のリラックスをもたらす。また、日本人は従来から風呂好きな文化をもち、季節に応じた薬湯や温泉・銭湯などの利用により人と関わる習慣をもっている。

②皮膚・粘膜及び被服の保護作用と清潔方法

顔面、頭皮・頭髪、手の汚れのメカニズムと保護対策については前単元で解説した。ここでは発汗の仕組みと皮膚・粘膜の清潔方法を学ぶ。

③安全で安楽な入浴の環境調整

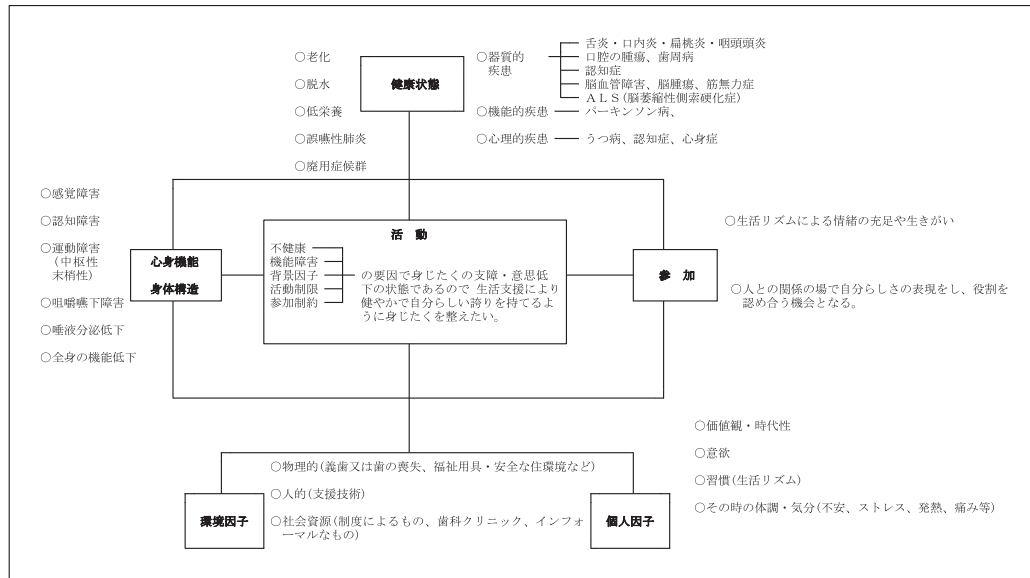


図4 ICF (生活機能・障害・健康の国際分類) を使った「身じたくに関連するところとからだのしくみと生活支援の関係」

入浴に伴う身体動作と福祉用具、環境調整について学ぶ。

④入浴の身体への負担とリラクゼーション効果及び事故防止

入浴が及ぼす身体、精神へのリラクゼーション効果及び事故防止の方法を学ぶ。

⑤老化、病気、心身機能低下の入浴に及ぼす影響と対応

老化による皮膚の変化や体力低下、気持の変化を理解し、入浴方法やスキンケアを学ぶ。そして運動機能低下、認知機能低下、皮膚疾患、内科疾患に応じた入浴の及ぼす影響と支援方法を学ぶ。

⑥入浴・清潔保持に関連する医療職との連携

入浴前後のアセスメントや感染症、褥瘡予防・悪化防止の対応を学ぶ。

(2) ICF (生活機能・障害・健康の国際分類) を使った「入浴・清潔保持に関連するところとからだのしくみと生活支援の関係」(図5参照)

6 単元「睡眠に関連するところとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 「睡眠に関連するところとからだのしくみ」の教育内容

①睡眠の生理的、精神的、社会的意義

睡眠をとることは一日の生活リズムと関連した生活活動の一つである。快眠は健康な睡眠・覚醒リズムにより脳と体を休めることにより生命活動を維持し、睡眠の質は寛ぎをもたらし日々の心身の充足に影響し、しかも、人との関係や人生の豊かさにも影響をもたらす。

②睡眠のメカニズムと快眠のための生活リズム

サーカディアンリズムや睡眠エネルギーによる睡眠のメカニズムを理解し、快眠の

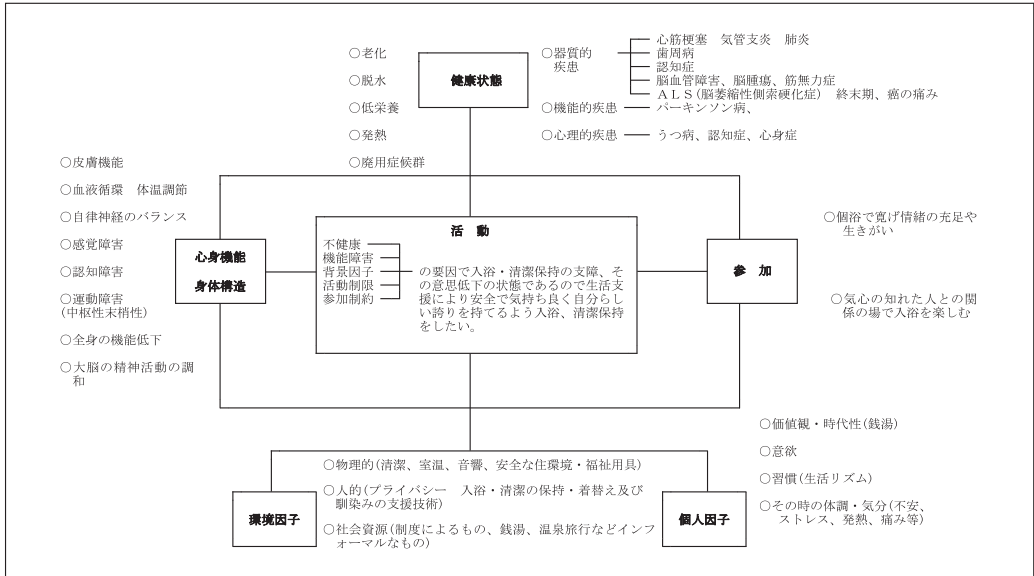


図5 ICF (生活機能・障害・健康の国際分類) を使った「入浴・清潔保持に関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」

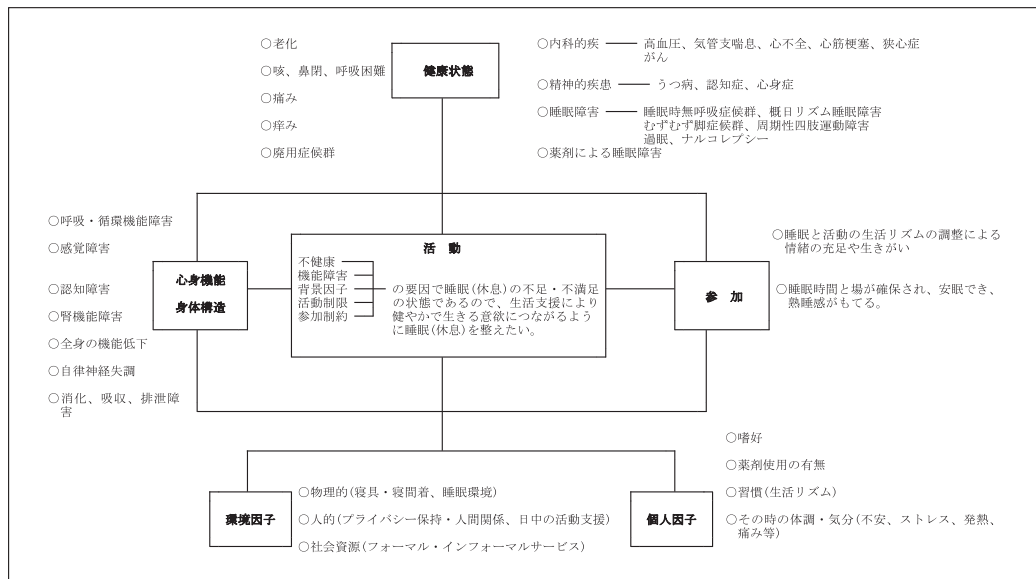


図6 ICF (生活機能・障害・健康の国際分類) を使った「睡眠(休息)に関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」

ための生活リズムとの関係を明らかにする。

③睡眠の質と量を高める日常生活活動、環境因子、個人因子との関係

睡眠は一日のトータルした生活によって成り立つとともに環境や個人の身体的、精神的な因子の影響を受けることを明らかにする。

④老化、病気、心身の機能低下が睡眠に及ぼす影響と対応

高齢者の不眠の特徴や病気とその治療薬、認知障害などが不眠に影響することやその対応を明らかにする。

⑤睡眠障害が心身に及ぼす状態の観察点と医療職との連携

うつ状態・不安・せん妄状態が睡眠に及ぼす影響を適確に把握し、平穏を保つ生活支援方法と医療職との連携のしかたを明らかにする。

(2) ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「睡眠に関連するところとからだのしくみと生活支援の関係」（図6参照）

7 単元「死にゆく人に関連するところとからだのしくみ」の教育内容と到達度

(1) 「死にゆく人に関連するところとからだのしくみ」の教育内容

①ターミナルケアの概念形成

ターミナルケアとは終末期の利用者への緩和医療とその人の尊厳ある生活を全うするというケアのトータルな支援である。更に死後においても故人・遺族への配慮を伴うものであることを学ぶ。

②ターミナル期の苦痛と苦痛緩和方法の理解

終末期には身体、精神、社会、経済、人間存在並びに日常生活の支障についての苦痛があり、それらが関連しあっている。WHOは痛み除去の権利と除痛方法を明示している。更に人々の生活史が終末期の苦痛へと影響する。苦痛緩和においては緩和医療の理解と利用者へ寄り添うケアの方法を学ぶ。

③高齢期のターミナル期の特徴と対応

高齢期のターミナル期の定義、特徴、心理過程を理解し、その対応と医療との連携の方法を学ぶ。更に、認知症高齢者の特徴と不安軽減・生活支援方法を学ぶ。

④臨死期の状態の観察と心身への安楽への対応

臨死期のバイタルサインズや意思の観察と家族の悲嘆の理解及び安心感を与える看取りの方法を理解する。

⑤死後の対応と遺族の悲嘆プロセスへのケア

⑥一・二人称の死を疑似体験し、死の準備教育

死を忌み嫌うという感情は避けられない。しかし、人は皆死に直面すると不安・恐怖の感情にさらされる。死の疑似体験と死生学の考え「より良い死はより良い生にあること」を活かし、自己の死生観をもつ。

(2) ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「死にゆく人に関連するところと

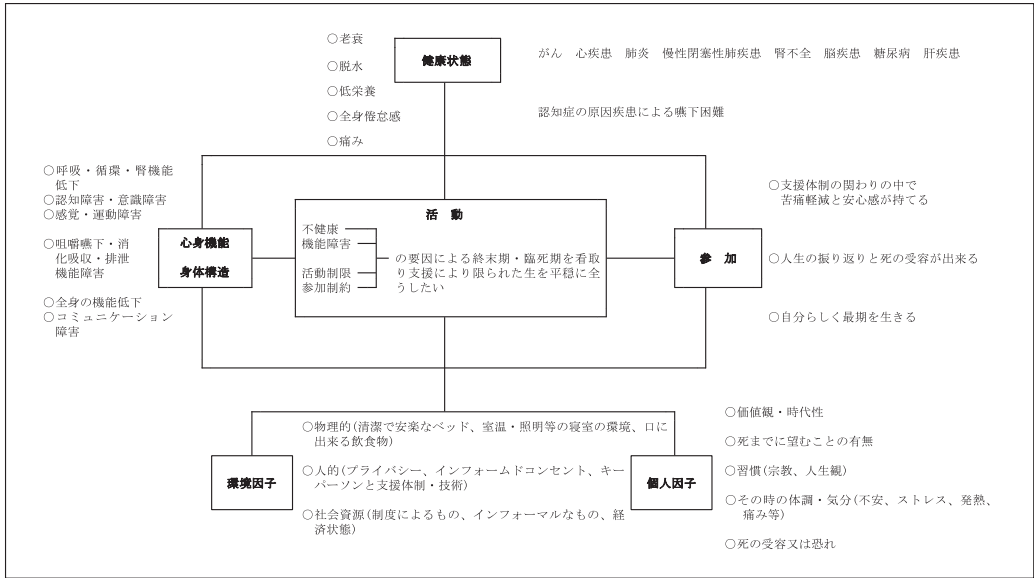


図7 ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）を使った「死にゆく人に関連するこころとからだのしくみと生活支援の関係」

「こころとからだのしくみと生活支援の関係」(図7参照)

IV 考察

科目「(日常生活活動に関連する) こころとからだのしくみ」の教育内容編成及び授業到達度の授業研究をととして「人間科学としての生活支援学（理論と実践の融合となり得る）」の知識となりうる人間観、援助を要するニーズの特定や生活支援の根拠となる知識とは何かを考える。

- 1 かけがえのない存在としての介護サービス利用者の日常生活活動を次の視点から明らかにする。
 - (1) 日常生活活動に関する生活支障・意思低下が生じている。
 - (2) 日常生活活動は生活世界での感じ、認識である。
 - (3) 日常生活活動は過去の記憶や経験からの影響を経て未来へと志向性をもって生きて動いて変化している。

- 2 日常生活活動のニーズや支援の判断のための知識並びに背景因子についての知識を明らかにする。
 - (1) 生活支障、意欲低下、体調変化の原因及び背景因子のメカニズムと生活支援方法。
 - (2) 日常生活活動に影響する環境要因と環境調整の視点。
 - (3) 日常生活活動の支障、意欲低下を生じる利用者の共通そして、個別の援助を要するニーズを以下のように特定する。

不健康、機能障害、活動制限、参加制約、背景因子などの要因で日常生活活動の支障や意欲低下の状態であるので生活支援により安定した自分らしい日常生活活動をしたい。

V まとめと今後の課題

この科目の授業研究に際してICFモデルを援用し、利用者の日常生活活動に関する生活支障と感情・認識、環境との成り立ち並びに援助を要するニーズとその生活支援方法の判断の根拠となる知識についてつかめた。医学モデルによる体の仕組みと病気の理解や治療方法の知識を援用しつつ一方では人間の内的世界の対話や他者との関わりの中で外界から取り入れる日常生活活動を支援するという現実の存在としての全体的人間への視点を取り入れ客観化しようと試みた。つまり、この科目の教育内容の編成にあたり生きていて個別の人間の生活支援学を求めようとした。基本的には何が生活支障や意思低下であるかを理解し、そして如何に生活支援するかを目ざす知識体系化であった。

生活支障・意思低下をもちながら環境との関係の中で生きて、感じ・志向をもった利用者的人間の存在をとらえ働き掛けるという意味をもった人間科学としての生活支援学への発展を痛感するところである。そのためには一層の領域「こころとからだのしくみ」の科目間の教育内容の整合性を熟慮し、人間の理解とニーズの判断やその充足のための知識体系化が課題である。

【参考文献】

- 鈴木正子著「看護することの哲学」医学書院 1996年
川口孝泰著「食事の援助技術」中央法規 2008年
小坂橋喜久代編著「こころとからだのしくみ」メヂカルフレンド社 2009年
富永裕久著「脳科学」PHP 2009年
黒澤貞夫著「人間科学的生活支援論」ミネルヴァ書房 2010年
川延宗之編「介護教育方法論」弘文堂 2008年

Summary

The Curriculum of the Subject “Mechanism of Mind and Body” in the New Curriculum of the Nursing Care Course

Masako Shiro

In this note we explain how the curriculum of the subject “Mechanism of mind and body” is designed and which characteristics of the curriculum has. We teach students the basis of understanding human being and the basic method of supporting daily lives in this subject. The curriculum is designed by applying the concept of ICF and we attempt to arrange the knowledge and skill of this field systematically as one field of the human science.

Keywords New Curriculum of the Nursing Care Course,
Mechanism of Mind and Body, ICF

(2010年11月1日受領)